

中世の熊野信仰と地域社会（一）

— 中世における南奥羽新宮熊野社の復元を試みる —

都 築 繁 利 伊 藤 喜 良

一 はじめに

熊野信仰の広がりや古代末期から中世にかけて爆発的であった。当時の朝廷の権力者たちが熊野へ熊野へと旅をして参詣した。特に、平氏政権時代から鎌倉幕府の成立期にかけて武門と争った朝廷側の最大の実力者である後白河法皇は三十四回、承久の乱を起こして鎌倉幕府によって隠岐に流された後鳥羽上皇は二十八回、院政時代の朝廷を牛耳った鳥羽上皇は二十一回も熊野神社に参詣しているのである。周知のごとく熊野は朝廷の存在した京都からは遠く、深い山岳地帯に存在して人里から隔絶していたのであるが、上皇等は多くの公家や供を連れて苦難をものともせず何十回も熊野を訪れているのである。

一方民衆は熊野にたいしてどのような信仰を持っていたのであろうか。実は民衆にとって熊野は復活再生の場所であった。中世の説経節で有名な「さんせい大夫」の主人公の「ずし王」などは復活再生した典型的な例である。中世にはハンセン病になったり奴隷的な境遇に落とされた者が復活再生し、復讐を遂げたり、幸せに暮らすという物語が好んで語られた。熊野の湯の峰温泉の「壺の湯」に入れば重い病気や障害が癒えるという信仰が中世には広がっていた。「壺の湯」は、湯の峰温泉の真ん中を流れる小川の中にある岩に掘られた小さな湯治場である。この「壺の湯」を目指して乞食や障害者が復活再生を願い、紀州の険しい山道を杖をつきながら、熊野本宮大社や湯の峰温泉へ旅をするという熊野詣が中世には爆発的に広まった。このような信

仰の広がりの中から、主人公が「壺の湯」で復活再生するという説経節の「小栗判官」の物語が生れるのである。

上述のように熊野信仰は中世社会の中に、畿内を中心として権力者、民衆を問わずに深く広く浸透していったのであるが、このような信仰は地方社会ではどのように受け止められたのであろうか。地方においても熊野信仰は人々の心を深くとらえた。例えば新熊野と称するような熊野三山を模倣したような神社が多く造られたり、信仰の勧請がなされるのである。現在でも全国各地に三千か所以上の熊野社が存在している。全国の津津浦浦で熊野信仰が享受されていたことを知る事ができよう。それゆえ、中世において、地方の人々が熊野信仰をどのようにとらえ、それを受容していたか、その実態を見ようとしたのが、本論文の趣旨である。検討しようとする場所は、福島県喜多方市の新宮熊野神社である。福島県内には熊野神社は百十七社あるといわれており（『熊野大社』学生社）、その中でも最も史料・資料に恵まれているのが新宮熊野神社である。

この新宮熊野神社について、現在残されている建造物、宝物、遺跡等から中世における神社の創立時期、その様態等について、紀伊国熊野三山と比較・参照しながら検討したのが本論文「中世の熊野信仰と地域社会（一）—中世における南奥羽新宮熊野神社の復元を試みる—」である。次回に執筆する同（二）においては、南奥羽新宮熊野神社と地域社会の様態を見ようとするものである。すなわち、中世においてこの地域における神社の果たした役割、人々と神社との関わりについて考察し、現在までどのような影響をあたえているか探してみたいと思う。この（一）・（二）の検討を通して会津地方の熊野信仰の様子、権力の様態、民衆動向を探していきたい。

なお、南奥喜多方新宮神社と紀州熊野三山を比較している点が多いが、その区別のため、紀州熊野は紀伊国熊野三山とし、喜多方新宮熊野神社は新宮熊野社として、明らかに分かるように区別した。

二 熊野信仰をめぐる

紀伊国熊野神社とその信仰について簡単に触れておくこととする。世界文化遺産として「熊野古道」が認定されていることより、熊野三山やその信仰については多くの書物が出版されており、よく知られているところである。そのため後の論旨との関係上要約にとどめることとする。

熊野三山とは周知のように和歌山県（紀伊国）に存在する熊野本宮、新宮、那智の各神社である。そしてこの三山は平安時代中期に三社プラス九社で熊野十二所権現として信仰されるようになった。その十二所とは、主たる三所の社殿は本宮は証誠殿、新宮は速玉宮（中御前）、那智は結宮（西御前）と呼ばれ、他の九所は五所王子と四所明神に分れ、前者は若宮、禪師宮、聖宮、児宮、子守宮、後者は一万宮と十万宮、勧請十五所、飛行夜叉、米持金剛童子と称した。

新宮市の熊野速玉大社に祀られ、国宝に指定されている神像四躯が存在している。それは熊野速玉大神、夫須美大神、家津御子大神、国常立命の四坐像である。この四躯の神像については次のようにいわれている（石川知彦「国宝神像を読み解く」『熊野大神』戎光祥出版）。熊野速玉大神は俗体の正座した木造の男神像であり、十世紀初頭より以前の作で、初期的な神像とされている。夫須美大神は那智の主祭神を表した俗体の木造女神像で、唐美人をモデルにした高い価値を持つ初期神像であるとされている。家津美御子大神は証誠殿に祀られている俗体の男の坐像で、制作年代は十世紀前半と推定されている。さらに、国常立命坐像は、家津美御子大神とともに祀られているが、熊野速玉大神坐像と共通するものがあるが、一部損傷している。いずれにしてもこの四躯の神像は日本で最も古く、最も優れたものである。

熊野の神々が出現する経緯について記した文献としては、「熊野権現御垂迹縁起」や『長寛勘文』（『群書類従』）が知られている。『長寛勘文』によれば、熊野部千与定という犬飼（獵師）が猪を弓で射て追跡していくと、大斎原にはえている櫟の木のもとで死んでいた。千与定はそこでその肉を食べて

一夜を過したが、その夜に櫟の木の上の月形が千与定に自分は熊野三所権現であると述べたという。三つの月のうち、一つは証誠大菩薩で、他は両所権現だと名乗ったという。証誠大菩薩は熊野本宮のことであり、両所権現とは新宮と那智のことである。熊野の祭神が山中の樹木に降臨したという話は、熊野信仰が深く山岳信仰と関わっていることを示しており、このことより修験道の聖地となっていき、さらに熊野本宮を中心に死者の霊がこもる山岳で、人の死後に魂がおもむく「死者の国」ともみられるようになったのである。

一方熊野は海とも深いかわりを持っていた。その関わりを持っていたのは熊野那智大社である。平安時代以後のことであるが、熊野那智から観音浄土を目指して補陀落渡海という死を賭した行動が行われた。それは、熊野の海の彼方に観音浄土の補陀落世界があるという信仰が存在していた。これは海上他界観ともいべきものであり、海の向こうに仏が存在して極楽浄土があるという観念であった。だから熊野那智山は海上の補陀落浄土への入り口と見なされており、その那智から西方浄土を目指して多くの人々が渡海していった。渡海の結末は「死者の国」へ行き、往生することになるのである。この行為は現代からみれば、宗教的な自殺行為といえることができる。

このように熊野は山岳信仰、海上補陀落信仰を合わせ持つ聖地として人々を引きつけたのであるが、もう一つ注目したいのは、中世には重要な意味をもっていた起請文に、熊野の牛王宝印を押した紙が使用されていたことである。牛王宝印がある料紙には熊野権現の使いという八咫鳥を用いた神文が書かれており、牛王とは国家安穩・悪霊退散等の意味が含まれているといい、起請文にこの神符を使用するのは「真心」を示すものであるとされている。このような起請文は中世社会の中で多く活用され、人々の生活や行動に大きな影響をあたえたものである。

このような山岳信仰、海上補陀落信仰を持つ熊野信仰は各地に爆発的に広まっていくのである。平安時代から鎌倉時代にかけて前述したように中央の公家層に熊野信仰はもてはやされたのであるが、鎌倉時代になると、東国の武士層の間にも影響を広めていった。それは東国にも勧請により、熊野社の

社領・荘園等が多く生れてきており、荘民の信仰を通して、熊野信仰の発展に役立ったものと思われる。また熊野が修験の聖地であることより、山伏や熊野先達等が多く生れて全国各地で活躍し、熊野信仰を布教していったものと考えられる。全国的にみたならば東国や東北地方が熊野の末社の数は優勢で、ことに東北地方の熊野信仰は盛んであり、民俗学的にも熊野と東北は密接な関係にあったとされている（新城常三『新稿寺社参詣の社会経済史的研究』307頁）。

東国や東北地方で熊野神社が多いのは、熊野三山が積極的に信仰を広め、地方武士が熊野神社を勧請し、東国の武士層の中にも熊野信仰を受容していたものが多かったと思われる。前掲新城氏の研究に依れば、鎌倉時代に熊野を勧請したことが知られている場所は七十六か所に及ぶが、その内三十余が東国や東北である。また鎌倉時代には各地に熊野社の所領が広がっていったことが指摘されている。

昭和五十五年頃の全国の熊野神社は三千余と述べたが、この時の東北地方には、青森六十三社、秋田六十八社、宮城七十七社、山形百四十四社、岩手六十七社、福島百十七社であった（前掲『熊野大社』）。そしてこの中でことに有名な熊野社が宮城県名取市に存在する熊野神社であり、戦国期には伊達氏の保護、あるいは伊達氏の准所領として存在しており、戦国期の伊達氏を研究する上で重要な神社である（伊藤喜良「会津の「公方」について」『福大史学』80）。また福島県喜多方市の新宮熊野神社も同様で、中世の会津地域を研究するために貴重な史料を提供している。この両神社には「御正体」という懸仏や鏡が数多く出土しており、名取の熊野社には千手観音像や十一面観音像、新宮熊野神社には文殊菩薩像などの仏像も多く存在している。新宮熊野神社には、長床とよばれる拜殿が存在するが、それは国の重要文化財に指定されている。本論文はこの新宮熊野神社の歴史を通して、中世の会津という地域の一側面を検討することである。

三 会津の新宮熊野神社

会津地方は中世初期に一時奥州藤原氏の支配下にあったが、鎌倉幕府の成立後、相模国の有力豪族であった三浦氏一族が文治五年（1189）に起こった「鎌倉幕府と平泉藤原氏との間の奥州合戦」の勲功により、会津を賜り、それ以後勢力を広げたとされている（『新編会津風土記』）。三浦氏一族の中でもとくに優勢であったのが蘆名氏であった。

中世初期に平泉藤原氏の支配下にあったとはいえ、会津は古代以来奥羽ではもっとも宗教や文化が発展した地域であった。仏教においては、この地域に平安時代までに建立された寺院は五十七ほど存在した。そしてその中心となったのが徳一が開いた磐梯町の恵日寺であった。そのためにこの地域は平安時代に作成された仏像も多い。

平安時代に花開いたこの地方の宗教文化の中で、その後会津地方の北部の人々の信仰の拠り所になっていたのが恵日寺や新宮熊野神社であった。この地方に熊野信仰が入ってきたことについては、平安時代の源義家の活躍と結び付けて語られている。その伝承は『新宮雑葉記』「由来之部」に次のように記されている。「後冷泉院ノ御宇、安倍ノ貞任王威ヲ背キシ時、八幡太郎源義家公、渠ヲ追討ノ為メ天喜・康平ノ際多クノ春秋ヲ経玉フ、イト六ケ敷カリシニ、熊野三所ニ信心ヲ凝シ、此軍利有ランニ於テハ東奥ニ三所ヲ遷シ奉ラント祈リ給ヒシ驗シニ事故無ク東夷平カニ成ヌ、因願三ツノ御社ヲ当州ニ奉遷ス、今熊野堂村之地ト云々」とあり、源義家が「前九年の役」の時に、安倍氏との戦いで自軍が有利になるように熊野三所（社）に祈り、もし奥羽を平定したならば、熊野三所を奥羽に勧請する約束し、勝利した後に河沼郡熊野堂村（現在の河東町）に「奉遷」したとされているのである。さらに、義家は「後三年の役」の後、熊野三山のうち、本宮を耶麻郡岩沢村（現在の喜多方市上三宮町）、新宮を耶麻郡新宮村（現在の喜多方市慶徳町）、那智を耶麻郡宇津野村（耶麻郡熱塩加納村）に遷宮したとされ、新宮はその時に現在の地に勧請されたものとされている。

一方このような義家が勧請したという伝承以前の延喜年間（平安中期）に、紀伊国熊野那智神社と深い関係がある「補陀落渡海」を会津郡の人物が行ったという伝えもあり、平安時代の中頃には熊野信仰が会津地方に入っていたのではないともいわれている（『喜多方市史』10）。会津地域はすでに述べたように東北地方でももっとも早くから中央の文化や宗教等を取り入れていたことは、天台宗の最澄と論争した僧侶徳一の活躍でも知られるところであり、熊野信仰が平安時代の中頃に会津に入ってきたと推定してもまったくの誤りではない。それはこれから検討する新宮熊野神社が所蔵している文化財等でも推測できる。

四 新宮熊野社の楼閣と所蔵の文化財をめぐる

（一） 建造物・伽藍等について

現在の新宮熊野社の建造物を概観しておこう。国指定重要文化財である長床と呼ばれている拝殿は慶長十六年（1611）に起こった大地震により、新宮熊野神社は崩壊してしまった。そこで、三年後に再建し、長床（拝殿）は江戸時代の正保二年（1645）、天明七年（1787）、文化三年（1806）に修理された。長床について『喜多方市史』10は「和様建築で、寝殿造りの様式で、屋根は寄棟造りの藁葺となっており、桁行九間、梁間四間の堂々たる建物であり、四十四本の太い円柱を立て、吹き抜けになっており、珍しい和風の建物である」としている。この建物の創建された年代については、1974年に出された長床の解体修理の報告書（『新宮熊野神社長床工事報告書』）は鎌倉時代初期のもので推定している。この推定に関わるものとして、前記した『新宮雑葉記』に「治承三年 新宮前殿鰐口鑄造」とあり、治承三年（1179）八月に僧伊勢なるものが「前殿」に四尺五寸の鰐口一つを「施入」したと記している。「前殿」は現在の長床（拝殿）と考えられ、「源平争乱」の直前に僧伊勢が鰐口を奉納していることが知られる。さらに長床を復元する際、基壇の内より出土したカワラケは、12世紀代に位置付けられるとされており（『会津

新宮城跡発掘調査報告書』)、『新宮雑葉記』の述べるところと一致する。このような記述や出土物からしても、新宮熊野神社の長床(拝殿)は平安末期から鎌倉初期ころと見なして誤りないであろう。

ところで『新宮雑葉記』とはどのような書物であろうか。この書物は新宮熊野神社が所蔵しているものであり、江戸時代の元禄十五年(1702)に渡辺直昌なる人物が荒廃した新宮神社とその地域を嘆いてまとめた書である。渡辺の序文によると、「熊野三所大権現」をこの地に勧請したのは源義家で、堂塔仏閣の建立はこの時で、繁栄をきわめたのであるが、現在は荒廃して苔に没し、草に埋もれて近隣の人々でも往時を知る人が少ないのは残念であると思い、このような状況をそのまま捨て置くことができないので一書を編んだとしている。ここで述べている大地震とは慶長十六年(1611)に起こった日本震災史上有名な災害のことである。そして次のような項目で記述している。それは「由来之部、開闢記、新宮旧跡之部、来歴之部、新宮地頭系譜、神体仏像之部、宝器之部、村老伝、鎮守下邑郷」である。以下この書物に書かれていることをすべて信用するわけではないが、他の資料(史料)と合わせて、この記述を史料にしたり、参考にしたりしながら論述していくこととする。

さて本題の建築物の検討に戻ろう。熊野神社の本殿は長床(拝殿)の正面の少し高く、石段を登ったところに東向きに並んで三社が存在している。中央の社が新宮(速玉宮、または西の御前ともいう)、向かって右(北側)の社が本宮(証誠殿、中殿ともいう)、向かって左(南側)が那智(結御前、中の御前ともいう)であり、紀伊国熊野三山(熊野速玉大社、熊野本宮大社、熊野那智大社)に倣ったものである。紀伊国熊野三山も新宮を速玉宮、本宮を証誠殿、那智を結宮と呼んでいる。これらの三社は中央の新宮が最も古く、他の二社は少し遅れるとされているが、三社の建造年代は鎌倉末期から室町初期あたりではないかとみられている(前掲『喜多方市史』10)。

この三社は慶長大地震の後にもとあった場所から移されて、三社が現在の場所の一角所に集中したものである。震災前は現在の三社の背面の丘陵に存

在していた。これについて『雑葉記』は、新宮は「御嶽山」とも呼ばれており、現在の三社の背面の丘が御嶽と呼ばれていることよりここに存在したと推定される。那智社は現在の大同寺の後ろの丘陵で、「字駿河」と称する地で、『雑葉記』が書かれたころには「駿河山」と呼んでいた。また本宮は「三山中ノ森也」と書いてあるだけであるが、「御嶽山」の左隣にある「字三嶽」であることは誤りない（各丘陵は論文末の地図を参照されたい）。この他、慶長の大地震で崩壊した建物は『雑葉記』の「由来之部」によれば、拝殿を始めとして四所の明神、五所の宮（王子）、勧請十五所の本地堂、一万宮の南殿、八所の廊閣、滝の宮、稲荷八幡の両宮、奥の院（神宮寺）、三多計明神、大山祇、羽山神社、神蔵、天満天神の宮居、四天王の東門、金剛力士の南門、大黒天の北門、補陀樂寺の千手堂、文殊堂、十王堂、三所の宮の本地堂、護摩堂、東浄堂、西恵堂、莊嚴堂、その他三十余院すべてが倒壊したとされ、残された楼閣は新宮、本宮、那智の三所のみであったという。この記述からまさに紀伊国熊野三山に倣った大伽藍が存在していたといえる。

これらの崩壊した建物で現在推定できる場所をコメントしておく、本地堂跡は、新宮寺屋敷の場所であり、五所宮（若一王子・禪寺宮・聖宮、児宮・子守宮）跡は那智社が存在した駿河山（字駿河）の東西であるという。奥の院は阿弥陀山（字阿弥陀）、新宮熊野神社が最も繁栄した時の第一の寺であった「一ノ寺」は現在の字一の寺である。これらの建造物があった場所は長床（拝殿）前面、三社の背面の小高い丘陵が連なる森の中で、この山中から現在残されているような仏像が掘り出されたという。その他の建物としては、十王堂は新宮寺と神宮寺の間あたりにあり、補陀樂堂（寺）は現在の大同寺のあるところに存在していたこと、文殊堂は新宮寺あたりにあったことが記録されている（地図参照）。なお、新宮寺と神宮寺は明治初期に合併して真言宗の真成寺となったが現在は無住で荒れ果てている。なお、東・南・北それぞれ門があり、東門は四天王像、南門は金剛力士像、北門は大黒天像に守られて存在していた。西門については『雑葉記』にはなにも書かれていないが、天満天神を祭っていた門であったか、背後が山々であったので存在

しなかった可能性もある。

現在の拝殿（長床）の前の丘陵は雑木林になっているが、慶長十六年（1611）に襲った大震災以前には、紀伊国熊野三山に存在する神社や寺院等と同じ名称を持った「三百六十坊」（「三十余坊」との記述もある）あったとされる壮大な楼閣が、これらの雑木林の中に整然とたたずんでいたものと推定される。雑木や雑草に覆われたこれらの地からは江戸時代には多くの仏像や神像等の文化財が掘り出されたと『新宮雑葉記』には記され、仏像の発見場所、その仏像の破損状態などが詳述されている。事実、現在、新宮熊野神社に所蔵されているものの中には、発掘されたものと思われるものも存在している。この地域の発掘調査を行ったならば、中世に存在した新宮熊野神社の遺物・遺構、宝物等があらわれ、この神社の中世における壮大な伽藍の様態がさらに明らかになると思われる。

（二） 神像・仏像

喜多方市の新宮熊野三社には、男女対の神像が存在している。『喜多方市史』10はその中で新宮社の男女の神像について、「男神像の像高が六〇・二cm、女神像が五〇・七cmである。男神像は巾子冠を戴き、袍（上衣）をつける。両手は胸前にあげ、袖の内にして拱手（両手の指を組む）する。袴をつけて坐し、脚部中央に儀式用の太刀をおびるときの平たい紐である平緒の垂れをあらわす」、「女神像は髪を中央で左右に振り分け、背面腰下まで長く垂らす。十二単風の衣をつけ、腹前に打袴の一部をあらわす。左手は垂下して軽くまげ、右手は前に出し、それぞれ手を袖の内に入れて坐す」と男女の神像の様態を記述している。本宮社の男女の神像は新宮社のものとはほぼ同じであるが、那智社女性の神像二軀である。これらの像もほぼ新宮社の女神像と同じである。この三社の神像の造立年代はほぼ同時期と推定されており、その時代は彫刻様式からして十一世紀中頃から後半と推定されており、新宮熊野社が喜多方市のこの地に創立されたとする伝承と一致する時代である。これらの彫刻群は福島県内では最古の神像彫刻といわれている（『喜多方市

史』10)。

すでに述べたように紀伊国熊野速玉大社には像高100cm 前後の国宝熊野速玉大神坐像、同熊野夫須美大神坐像という神像等が鎮座している。このような神像とは別に紀伊国熊野三山には、新宮熊野神社の神像とそっくりな像が多く存在している。その中で喜多方の新宮・本宮の男性神像と紀伊国熊野速玉大社が所蔵する「伊邪那岐神坐像」と同国熊野那智大社蔵の「男神坐像」がきわめて似ているのである。速玉大社の神像は国宝大神坐像とともに安置されているものであるが、像高が二六・六 cm と喜多方のものより小振りである。この像の製作時期は、十二世紀後半、平安時代末期から鎌倉時代にかけてのものであると推定されている（和歌山県博物館刊『熊野三山の至宝』）。後者の像も喜多方のものとはかなり相似し、この像も平安時代後期の様式を示しており、制作年代は十二世紀ころとみられる（前掲『熊野三山の至宝』）。喜多方新宮熊野神社の女性の神像はどうであろうか。これも紀伊国熊野速玉大社によく似たものが存在している。天照大神の像とされている「皇天神坐像」である。これも喜多方のものより小振りであるが、造られたのは十一世紀半ばから後半ころとされている（前掲『熊野三山の至宝』）。

喜多方新宮熊野神社に残されている男女の神像と紀伊国熊野速玉大社の神像を比較してみたのであるが、その造立年代は紀伊国のものが十一世紀から十二世紀末ころまでとされていることより、喜多方新宮熊野神社のものがこれより古いとは考えにくい。喜多方の神像は「本拠地」である紀伊国熊野三山の神像が製作された後に、紀伊国から持ち込まれたものか、あるいは紀伊国の製作者が喜多方地域に来訪して成したものと推定され、平安末期から鎌倉初期にかけて造られたものと考えられる。喜多方新宮に残されている神像の作成年代がこの神社の創建伝承にほぼ近いことから、源義家が勧請したかどうかはともかく、平安時代末期ころにはこの神社が造られていたであろうと推量されるのである。

仏像を検討してみる。新宮熊野神社の宝物殿に安置されている文殊菩薩獅像が有名である。この獅像は『新宮雜葉記』によれば、「頼朝公常二信ヲ深

シ給フ、且文殊薩タノ形像ヲ当社ノ列堂ニ安置シ給フ、コレ運慶ノ刻メル尊像也、是レ乃チ建久三年ノ御草創也」とあり、鎌倉幕府の将軍となった源頼朝と関係づけ、建久三年（1192）に造られたと述べている。現在におけるこの像の創作年代の鑑定は、十二世紀後半と考えられているので（『喜多方市史』10）、頼朝が寄進したかどうかはともかく、創作年代は『新宮雜葉記』の記述とほぼ一致する。

その他にも多くの仏像が存在する。『喜多方市史』・『塩川町史』や『新宮雜葉記』等を参考にして仏像の特徴や造られた年代について結論だけを述べていくこととする。薬師如来坐像は、慈覚大師の作と伝えられているが、この像も文殊菩薩と同様に十二世紀後半に造られたものと推定されている。そしてこの像を守護する十二神将もある。さらに定朝作と伝えられる如意輪観音像、虚空蔵菩薩も薬師如来像と同じ時期の十二世紀後半に造立されたものである。鎌倉時代の十三世紀中頃に作成されたものとして銅造阿弥陀如来立像が存在している。さらに『新宮雜葉記』が書かれた時には地蔵、龍樹、十王、大黒、弘法大師、千手観音、金剛力士像があったという、現在は存在していない。さらに、神社が倒壊したために山中の土の中に埋もれ、朽ち果てて特定できない仏像が二十四、五体あったとされている。これらの仏像は本地仏として新宮熊野社の諸堂塔に安置されていたであろう。

慶長十六年の大震災以前の新宮熊野神社には本地仏として諸宮に仏像が安置されて崇められていた。現在残されている文殊菩薩は十万宮、薬師如来は新宮、如意輪観音は児宮、阿弥陀如来は本宮に安置されていたものである。

『新宮雜葉記』に乗せられている仏たちは地蔵菩薩が禪師宮、龍樹菩薩が聖宮、千手観音が那智社に安置されていたものと思われる。その他朽ち果てていて特定できない仏の中には、熊野十二所権現の本地仏である観音菩薩、（子守宮の本地仏、以下同）、普賢菩薩（一万宮）、釈迦如来（勧請十五所）、不動明王（飛行夜叉）、毘沙門天（米持金剛童子）等存在していたと推測される。これらの本地仏を安置する諸宮が大震災以前の神領域の中に点在していたものと思われ、それは三十余坊あったという。これ以外に『新宮雜葉

記』には虚空蔵菩薩が湯峰本尊塔の仏として存在していたという。

（三）懸仏・牛王宝印等

熊野神社で大変に重要視されていたのが懸仏である。これは「御正体」とも呼ばれており、「本社末社御正体」と述べられているように各堂塔の本地仏ごとに造られていた。この懸仏とは鏡の面に写しだされた仏の姿をあらわしたものであり、銅鏡に仏の姿を刻んでいる「神器」である。紀伊国熊野三山には阿弥陀や薬師如来、千手観音等の多数の懸仏が残されている。『会津旧事雑考』や『新宮雑葉記』によれば、江戸時代の中頃までは、鎌倉末期、永仁四年（1296）、元亨三年（1323）、正中二年（1325）銘の懸仏が存在していたというが、現存していない。なお、「弥勒」元年の年号を持つ懸仏が存在したとされており、この「弥勒」は私年号であり、公的なものではないので、承安元年（1171）と『会津旧事雑考』は比定しているが、不詳である。これらの懸仏は消失してしまっているが、現在新宮熊野神社が所蔵しているものは鉄造の「阿弥陀如来及び両脇侍坐像懸仏」、「三尊坐像懸仏」で、南北朝時代から室町時代のもものと推定されている（『喜多方市史』10）。このように新宮熊野神社も紀伊国熊野三山に倣って、中世には多くの懸仏が作成されたものと推測できる。

紀伊国熊野神社で有名なものは牛王宝印である。これは本来護符として使用されていたのであるが、前述したように中世には起請文の料紙として多く使用された。神仏に誓約したことを厳重に守るという約束したのが起請文であり、呪符として中世社会の中で大きな比重を占めるものであった。そしてこの起請文には熊野の牛王宝印が用いられたのである。新宮熊野神社においても牛王宝印の版木が宝物として所蔵されている。この版木は文保二年（1318）十一月二日の日付があり、「熊野山宝印」と彫られている。この牛王宝印は東国で最古のものであり、最近まで使用されていた。新宮熊野の牛王宝印は怨霊や疫病を防ぐための呪符として使用されたものと考えられる。現在でも怨霊や疫病を阻止する儀礼が行われているが、この点については、

次回執筆の(二)において詳述する。

その他、相撲力士像という珍しいものも宝物として存在している。それは、木造相撲力士像二軀と相撲を取っている一対の力士像である。前者の力士像は赤力士、白力士と呼ばれており、運慶の作で、源義家が熊野神社を造る時に、合戦の勝負を相撲で占ったのでこの像があるのでであると伝えられている(『新編会津風土記』)。この二軀の力士像の造立年代は平安時代後期ごろと推定されている(『喜多方市史』10)。後者のものが造られたものは室町時代ごろとされている。なお、新宮熊野神社には戦国時代のものである「相撲田楽日記」が所蔵されており、一番から十五番間での神社周辺の村落による相撲の組み合わせが書かれている。相撲像や「相撲田楽日記」からして、かなり古くから、もしかしたら平安後期ごろから新宮熊野地域で相撲行事が行われていた可能性があると思われる。この相撲像も新宮熊野神社の創草を推定しうるものの一つである。

五 小括 — 中世における新宮熊野神社の様態 —

日本の災害史に残る慶長十六年(1611)の大地震は新宮熊野神社を壊滅させてしまった。それ以前の戦国時代には新宮熊野社の「山徒」や「社家の輩」が重宝を奪い取り、荘民は社領をかすめ取り、神社はかなり衰えていたという(『新宮雑業記』)。だが慶長十六年の大震災が決定的に神社を痛め付けたのであった。その後倒壊したままであったのであるが、再建は震災があった四〇余年後の正保年間(1644~48)から始まり、寛文年間(1661~72)以後、会津藩主保科正之の援助を受けて再建した。

大震災以前の新宮熊野社は紀伊国熊野三山を忠実に模し、小形化した様態や規模であり、現在と比較するとかなり広い規模の三山(御嶽山・駿河山・字三嶽)が存在して、そこに新宮、本宮、那智の各社が造られていた。現在の三社は再建によって各山から集中されたものである(添付した新宮熊野神社周辺に関わる地図を参照されたい)。伽藍も紀伊国のものとはほぼ同じで

あったと推測され、新宮・本宮・那智の他、若宮や禪師宮、聖宮等の熊野十二所権現が存在していた。また、紀伊国那智大社の海の信仰である補陀落渡海に関わる補陀落山寺を模したと思われる補陀落堂（寺）も存在していた。さらに「湯の峰」を模した「湯屋（壺の湯）」もあったと思われ、その遺構の井戸も存在している。新宮熊野社の堂塔には紀伊国熊野三山と同様の本地仏が安置されていたといえる。現在残されている仏像はその一部である。また神像も紀伊国のものをそっくり真似た像が飾られていた。懸仏も同じである。

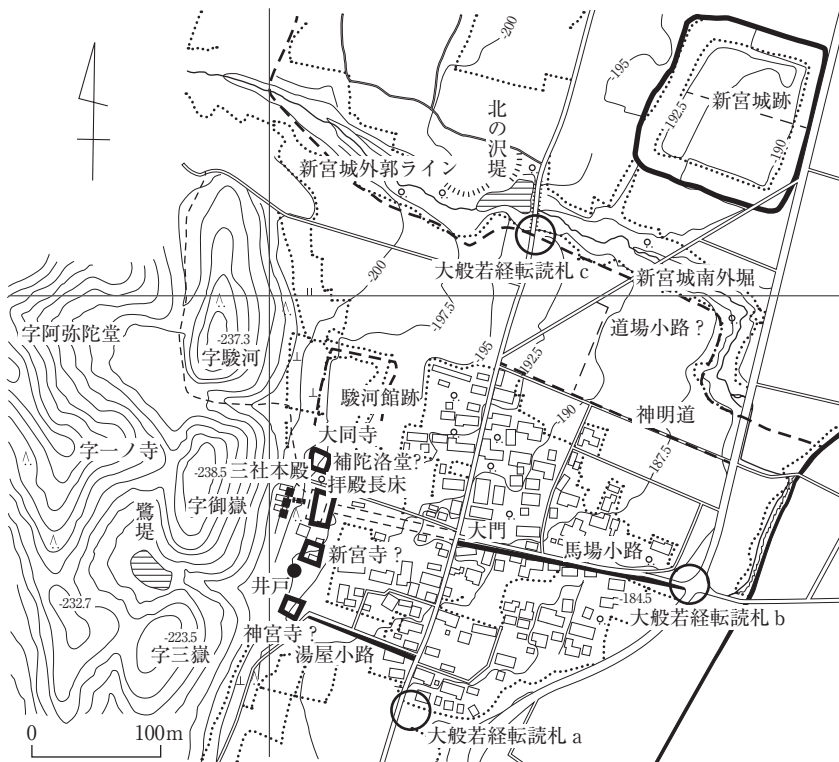
このような整然とした熊野神社が会津北部に造られた年代は、確定できないが、現在残っている文化財等の作成年代の推定から、源義家が勧請したという伝説はともかく、平安時代末期ごろには創建されていたと推定するのが穏当である。

当時の会津の宗教文化の中心であったのは、磐梯町の恵日寺であり、強大な勢力をほこっており「大寺」と呼ばれていた。この恵日寺と新宮熊野社は会津で勢力争いを続けていたことが『新宮雑葉記』にもみえている。新宮熊野神社の僧侶は三百六十余人、禰宜・神主は百余人、堂塔は三十余坊と伝えられている（『新宮雑葉記』）。これらの僧侶や神主等を統括したのは「長吏・在庁・申口」とよばれる者たちであった。これらの数字が事実ならば、相当に大きな勢力であり、恵日寺（大寺）と抗争したとする『新宮雑葉記』の指摘もうなずけるものがある。

本論文においては、中世における新宮熊野神社の実態を明らかにすることに努めた。なお、新宮熊野神社の500メートルほどのところに「大城」（国史跡の新宮城趾）と称する室町時代の国人領主新宮氏の居城が存在するが、新宮氏やこの城を中心とする会津地域の中世における動向、この城と熊野神社の関わりについては、次回執筆「中世の熊野信仰と地域社会（二）」で詳述したい。

注

当論文は都築・伊藤の両者が共同で責任を負うものであるが、文責は一・二・三節は都築、四・五節は伊藤である。



(『会津新宮城跡発掘調査報告書』第45図を一部修正して引用)

図 新宮熊野神社周辺の状況